

第三回熊本大学附属図書館特殊資料展

細川幽齋関係文学書

出品目録

昭和61年11月13日～15日

熊本大学附属図書館

1. いずもふどき 出雲風土記

整理番号 107.36.6

風土記は古代官撰の地誌で諸国の地名由来、山野、動植物などについて記している。和銅6年(713)5月詔命を受けて編述された。その大部分は現存せず、常陸^{ひたち}、播磨^{はりま}、出雲、豊後、肥前の五風土記だけが今に伝わっている。『出雲風土記』は天平5年(733)に成立したもので、現存の風土記の中で唯一の完本である。永青文庫本は奥に慶長2年(1597)10月の細川幽齋の署名を持つ由緒正しい善本であり、書写年紀も伝本中最も古い。(25.7×20.2cm)

2. ぶんごふどき 豊後風土記

整理番号 107.36.6

『豊後風土記』は天平11年(739)ごろまでに成立か。編述には大宰府が関与したと思われる。永青文庫本は「御歌書目録」によれば、幽齋近侍の臣佐方宗佐の書写で、文禄3年(1594)幽齋が奥書を加えている。現存の伝本中、書写年紀を明らかにする最古の写本で、本文も古体を残す最善本である。(25.7×20.2cm)

3. いせものぶり 伊勢物語

整理番号 赤216.17

『伊勢物語』は平安時代前期の代表的な歌物語である。永青文庫本は藤原定家が写した本の系統の校訂本であるが、本文の行間に多くの書き入れが加えられている。この注記は二条家流の旧注を広く取り込んでおり、室町後期の伊勢物語享受の実態を考えるうえで極めて注目される資料である。箱書によれば、本文・細注ともに一条関白兼良^{かねら}(1402-1481)の筆という。(23.4×16.2cm)

4. げん じ ものがたり 源氏物語 54冊

整理番号 赤216.3

『源氏物語』は、平安時代中期に紫式部が書いた日本古典の代表作。全54帖。伝本は多いが、室町時代から藤原定家が整定した青表紙本が通行するようになった。永青文庫本も本文は青表紙本系統であるが、肖柏本などで校合している。巻頭や行間に『河海抄』以下の旧注などを引く多くの書き入れ・細注が加えられており、これらはすべて細川幽斎の自筆である。ただ、若菜下巻だけは俳人山崎宗鑑そうかん筆。幽斎の源氏学を知り得る重要な文献といえる。(23.3×16.2cm)

5. こきんわ かるくじょう 古今和歌六帖 6冊

整理番号 107.36.4

作歌の手引書として編まれた平安時代の類題和歌集。貞元・天元ごろの成立。6巻6冊。子日ねのひ・若葉う・卯の花など500余りの歌題に分類して約4500首を集めている。現存する十数本の伝本はすべて藤原定家の本を転写した系統の本であるが、永青文庫本を除いて、すべて近世の写本である。奥書によれば、文禄4年(1595)世尊寺行能筆の禁裏本を細川幽斎と数人の門下が写したもので、諸伝本の中心となる重要な本である。(25.7×20.2cm)

6. じゆつしゆうたあわせ 十首歌合

整理番号 107.36.7

一般に「後嵯峨院百三十番歌合」「宝治歌合」などという。宝治元年(1247)9月に後嵯峨院が主催、公卿、廷臣、有力歌人など26人をそろえた十題百三十番の歌合である。藤原為家が詳しい判詞を加えている。永青文庫本は為家の判に対する蓮性の反論「蓮性陳状」を付載し、慶長3年(1598)細川幽斎が奥書を記し署名している。現存十数本の写本中、古写本の本文を伝える善本である。(25.7×20.1cm)

7. ひやくばんうたあわせ 百番歌合

整理番号 107.36.7

永仁4年(1296)藤原為家の子慶融(～1305ごろ)が曾祖父藤原俊成の秀歌200首を選び歌合に編んだもの。伝本としては他に菊屋文庫旧蔵本が知られるのみで、永青文庫本はそれを補い、編者、成立事情を伝える貴重な伝本である。奥書によれば、天正16年(1588)に中院通勝が書写、さらに細川幽斎の手元で転写されたものである。(25.6×20.1cm)

8. ようどうしやう 幼童抄

整理番号 107.36.6

室町時代の代表的な連歌師宗長(1448-1532)が老後に、幼童のために述作した連歌作法の書である。すべて宗長と同時期の書簡を裏返した紙背しはいを用いて書かれてい

る。奥に「玄旨（花押）」の署名があり、細川幽斎が入手し改装して蔵書に加えたものと思われる。(23.0×18.5cm)

9. うたあわせるいじゆう 歌合類聚 7冊

整理番号 107.36.5

細川幽斎はかねてから俊成・定家の遺訓を学ぶために歌合の収集を願っていたが、その願望は後陽成天皇に達してかなえられた。慶長5年(1600)幽斎は禁裏の歌合類44度を借り出すことを得、多くの門弟の手を借りて書写きようごう校合した。いずれも奥に「以勅本奉書写校合訖 慶長五年仲夏下澣 玄旨（花押）」と幽斎の署名があり、永青文庫に一括蔵されている。これらの歌合は、宮内庁書陵部蔵の歌合と密接な関係をもつ善本ばかりである。(25.6×20.1cm)

10. れんが さほうしょ 連歌作法書

整理番号 108.5.12

もともとの書名はないが、その内容によって「連歌作法書」と仮題して呼称される。箱書は「幽斎様御筆御歌書」。天正7年(1579)幽斎が初心者のために著した連歌入門書である。連歌の用語や付合つけあいなどを詳しく記している。時に幽斎は46歳、青竜寺城中で執筆したものか。(25.0×17.4cm)

11. わくんおういん 和訓押韻

整理番号 107.36.2

和漢と漢和、あるいは漢詩特に漢和連歌を詠むために、韻字を探す便宜を考えて著された字音字典の一種。韻脚に用いる「東」以下の韻字11に属する漢字を挙げ、出典・訓義を注記している。作者については里村紹巴さとむらじょうは説・一条兼良説・細川幽斎説があるが、永青文庫蔵「御歌書目録」は幽斎編のように記しており注意される。永青文庫本は狂歌作者雄長老えいほようちゆう(英甫永雄)の筆と伝え、奥に天文20年(1592)幽斎が署名している。伝本中最も古い善本である。(12.8×16.7cm)

12. しんせんまんようしゆう 新撰万葉集

整理番号 107.36.6

俗に「菅家万葉集」ともいい、菅原道真の撰と伝える平安時代の私撰集である。万葉仮名書きの和歌と和歌の要旨を漢訳した七言絶句を対応させた内容は、古今集成立前夜の和歌復興を語るものとして注目される。永青文庫本は中院通勝と雄長老とが書写し、細川幽斎が奥書を記している。本書は原撰本系統の唯一の完本として貴重な伝本である。(25.8×20.2cm)

13. ゆうさいこうさんさいこうおんひつうたいほん 幽斎公三斎公御筆謡本 10冊

整理番号 108.5.16

観世流の謡本で、稻舟・安古木・短冊忠教ただのり・富士太鼓・高砂・小袖曾我しやうしやう・猩々・竹

雪・^{おみなえし}女郎花・安達ヶ原の10番から成っている。安達ヶ原を除く各冊に、信光または長俊の青表紙本によって章句を施した旨の観世小次郎元頼の奥書があり、本書の由緒正しさが分かる。元頼は観世次郎権守信光の孫、弥次郎長俊の子で、観世座のワキとして極めて業績のあった人。箱書の所伝によれば、幽齋・三齋の書写になるという。(20.7×13.8cm)

14. ^{おおかわ ひ でんしやう}太鞆秘伝抄

整理番号 107.36.6

細川幽齋は観世座の太鼓の名人観世与左衛門国広（^{いが}似我与五郎。1506? - 1580?）を師匠とした能の太鼓の名手であった。本書は幽齋が観世与左衛門国広から伝えられた太鼓の秘伝書を、さらに弟子の小崎彦次郎に相伝したものの。巻末に文禄2年（1593）の幽齋の奥書がある。本書は幽齋が相伝していた観世方太鼓の秘伝を忠実に写し留めたものとして注意される。小崎彦次郎は小崎図書の子で、織田信雄の家臣。(26.5×18.7cm)

15. ^{えい か たいがいはう しやう か たいりやくしやう}詠歌大概抄・秀歌大略抄 各1冊

整理番号 赤210.90

藤原定家が著した歌論書『詠歌大概』についての三光院内府（三条西実枝）の講釈を幽齋が天正14年（1586）にまとめたものである。『詠歌大概』は、漢文体の歌論の部分と103首の秀歌例をあげた「秀歌之体大略」とから成り、「小倉百人一首」などとともに定家著作の三部抄の一つとして後世尊重された。永青文庫本は幽齋自筆という旨の証文・伝来書を添えている。幽齋が後年推敲し、補注を加える以前の原初的な形態を伝える伝本として重要な1本である。(25.8×20.6cm)

16. ^{しんちよ(せん わ か しやう)}新勅撰和歌集 2冊

整理番号 108.5.6

『新勅撰和歌集』は藤原定家が単独で撰進した9番目の勅撰和歌集。20巻。撰集下命から2年9カ月を経て文暦2年（1235）完成した。永青文庫本は定家の自筆本と伝えて細川家に秘襲されてきた貴重な写本である。和歌排列の手直しや文字の削除・削改などが認められ、その撰集過程をうかがわせる重要な1本である。(24.5×14.5cm)

17. ^{てんしやうに(めい)ねんえいそ}天正廿年詠草

整理番号 赤208.111

天正20年（1592）細川幽齋が詠んだ和歌・連歌の一部を、^{ひなみ}日次的に自ら書き留めたもの。元日試筆、9日会始、豊臣秀吉の入唐西下に従うための饞別の会、下国途次の連歌会、次いで鹿児島に下り9月27日興行の連歌会の詠句で終わっている。幽齋の精力的な文学活動を伝える貴重な資料である。(26.0×19.8cm)